

令和二年度 特色 入試 問題

《総合人間学部》

文系総合問題

一〇〇点満点

(注意)

- 一、問題冊子および解答冊子は係員の指示があるまで開かないこと。
- 二、問題冊子は表紙のほかに4ページ、解答冊子は表紙のほかに7ページある。
なお、別に下書き用紙7枚を配布する。
- 三、問題は一題(二問)である(1ページから4ページ)。
- 四、試験開始後、解答冊子の表紙所定欄に受験番号・氏名をはっきり記入すること。表紙には、
これら以外のことを書いてはならない。
- 五、解答はすべて解答冊子の指定された箇所に記入すること。
- 六、解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。
- 七、解答冊子は、どのページも切り離してはならない。
- 八、問題冊子、下書き用紙は持ち帰ってもよいが、解答冊子は持ち帰ってはならない。

以下の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

さて、ここまでわかるといふことについてさまざまに考えてきましたが、つきつめると、わかり方はふたつのパターンにまとめられるのではないかと思います。つまり、答えが自分の頭の中に用意出来るタイプの場合と、答えが自分の外（自然とか社会とか）にか存在しないタイプのわかりです。

答えが自分の頭の中に用意出来る、とはどういうことでしょうか。すでに述べたことですが、われわれが相手の会話を理解出来るのは自分の頭の中にモデルが準備されていて、それと重ね合わせる事が出来るからです。

今日はよいお天気ですね、と話しかけられた時は、実は自分の頭の中でも「今日はよいお天気ですね」と、同じ言葉を繰り返しているのです。そして相手の言葉と自分の言葉とがうまく重なったとき、わかったと感じます。外国語がわからないのは、自分の中に重ね合わせるに使う材料がないか、あっても少ないため、重ね合わせが出来ないので。自分の持っている言葉の財産が増え、重ね合わせがうまくゆくようになると、少しずつわかるようになります。

筆者の友人でアメリカ滞在の最初のころ、毎日毎日年を尋ねられるので変な国だと思っていた、という人がいます。

How are you? という言葉を How old are you? と聞き間違えていたのだそうです。

聞き間違えというのは、相手の言葉と自分の持っている言葉との重ね合わせ（あるいは照らし合わせ）に失敗することです。重ね合わせは、予測と言い換えることも出来ます。相手がこう言ったのだろうな、という予測がうまくゆかないのです。失語症の人は手持ちの言葉が失われるため、このような重ね合わせがうまくゆかなくなります。「上を向いてください」というと、横を向いたり、「右を向いてください」というと、左を向いたりします。頭を動かさずにいるらしい、というくらいのおおざっぱな予測は立てられるのですが、それ以上は正確に自分の言葉を相手の言葉に重ね合わせる事が出来なくなります。

やはり失語症の人で、ほとんど会話にならない人でも「鬼に……」などと話しかけると「金棒」と返し、「猫に……」という「小判」と続けることの出来る人がいて、こちらがびっくりすることがあります。意味の説明は出来ないのですが、相手の言葉の一部があれば、それをきっかけに「猫に小判」という自分が持っている言葉が呼び出され、その手持ちの言葉を聞いた言葉にうまく重ね合わせることが出来るわけです。

学校教育という教育形式は、多くがこの重ね合わせ的理解に重点を置いています。将来、知らないことに遭遇したとき、重ね合わせ

に使えるようなさまざまなモデルを教えようとはします。先生がモデルであり、教科書がモデルです。われわれは学校で教えられたことを自分の判断の基準とし、人生を切り開いてゆくことになります。

一方、もうひとつのわかり、つまり答えが自分の外（自然とか社会とか）にしか存在しないタイプのわかりがあります。こちらはかなり性質が違います。

自分の中には重ね合わせるべきモデルは用意されていません。つまり既知の答えはありません。参照すべき教科書もなく、先生も教えてはくれません。自分で新しく発見してゆくしかないタイプの理解です。

たとえば自然の仕組み、自然の働きに関する理解がそうです。

ふたつの物質の間には引力が存在する、などという理解は自分の頭が持っている経験とは重ね合わせようがありません。これは人間の心が思いついたひとつの仮説です。この仮説が正しいかどうかは、自分の経験だけでは答えの出しようがありません。答えは自然に問うしかありません。つまり、実験しなければわからないのです。実験の中から、あ、そうか、と発見するのです。

心と脳の関係なども、よくわからない自然の働きのひとつです。

「心は脳とは別の存在である」と、考えている哲学者や宗教家があります。ですが、「心が脳を離れて存在するわけがない」という考えも成り立ちます。どちらの場合も、われわれの頭の中に、答えは用

意されていません。重ね合わせるべきモデルはないのです。この関係の答えは自然だけが持つており、自然に問うしか、解決の道はありません。

自然にどうやって答えを尋ねるかという、まず自分で自分なりの答え、あるいは説明の仕方（仮説といいます）を作り出し、その仮説でうまくゆくかどうかを観察してみるわけです。

実は「心は脳とは別の存在である」というのも、「心が脳を離れて存在するわけがない」というのも、仮説にすぎません。

「心は脳とは別の存在である」と、考えている哲学者や宗教家は、この仮説がうまく自然を説明するかと考えています。一七世紀のデカルトという哲学者は、今ここで考えている自分、そして、今ここで考えているという事実がはたして本当のことかどうかを疑っている自分、この考えたり、疑ったりしている存在以外に確かな存在はどこにもない、ということを見ました。そこから心は身体からは自立した存在である、という強力な思想を展開したのです。

ひとつの仮説を打ち立て、それを心という自然に尋ねてみたところ、心がああそれでいいよと答えてくれたわけです。

一方、「心は脳の働きである」というのも仮説です。この仮説を用いると、人が死ぬと心がなくなること、死なないまでも、昏睡になると心の働きがなくなること、薬を使って脳の働きを変えれば、心の働きが変わることも、脳が損傷されれば心の働きも損傷される

ことも、すべて説明出来ます。「心は脳の働きである」という仮説に
対して、自然がそれで話が合うよ、と答えを示してくれているので
す。筆者はこの考えを信じています。おそらく科学者の九九パーセ
ントはこの考えを信じているのではないかと思います。

でも、どちらが本当なのかというと、実はわかりません。なぜな
ら、われわれの頭の中には答えはなく、答えは自然の中にしか存在
しないからです。

科学的研究の世界のわかる・わからないはすべて、このタイプで
す。わからないことをすでにわかっている説明の仕方によってなぞ
ってゆくのではなく、わからないことを仮説をたてながら説明して
ゆくのが仕事です。最近では脳の研究が盛んですが、研究が盛んだと
いうことは、とりもなおさず脳の働きがどうなっているのか、心の
働きがどうなっているのか、よくわかっているということなんです。
あるいは遺伝子の研究が盛んです。遺伝子もその働きがよくわから
ないので。病気の世界もわからないことばかりです。わかった分
だけ、わからないことが増加するようないところがあります。ひとつ
わかると、その向こうに別の問題が発見されます。研究には終わり
というものが無いのです。

心の働きの結果である人間のふるまい、さらにその結果である社
会の動きなどについての理解も自然現象の理解と似ています。

われわれは社会的存在で、人と交わって生きてゆくしかありませ

んが、その交わって生きている人たちが心の中で何を考え、何を目
指しているのかは、本当のところはよくわかりません。自分が何を
考えているのかすら、実はつきつめてゆくとよくわからなくなりま
す。

なぜ人は人を憎むのか、なぜ人は人を殺すのか、なぜ人は人をい
じめめるのか、毎日毎日よくわからない事件が続くのが社会の現実で
す。このような世界で、われわれはなんとか自分なりの生き方を発
見し、工夫し、その生き方を実験（実践）しながら、生きていると
いえます。そして自分の選びとつた生き方がうまくゆくと自信を深
め、世の中がわかったような気になります。うまくゆかないと、自
信を失い、世の中わからないと落ち込んでしまいます。

学校で教わるタイプの理解を重ね合わせの理解と呼ぶなら、自分
で仮説を立ててゆくしかないタイプの理解は発見的理解と呼ぶこと
が出来ます。われわれはこのふたつのわかり方を駆使して、社会に
立ち向かっています。しかし、行動に本当に必要なのは後者である
ことは説明の必要もないでしょう。社会で生きてゆく、自然の中で
生きてゆく、というのはその時その時、新しい発見、新しい仮説を
必要とします。

英語の表現に、海図なき海へ旅立つ、というのがあります。

正しい海図が準備されている海を航海するのは安全ですが、大発

見時代のようにまだ知られていない、海図のない海に向かって帆を上げるのは大変なことでした。すべて自分の判断にしたがって、海図を作りつつ航海してゆかなければなりません。生きてゆく、というのは海図なき航海に似ています。わかっているようで、何もわかっていないのが人生です。

われわれは何となく、困ったことがあれば誰かがなんとかしてくれるだろう（「誰か」が海図です）、わからないことがあれば誰かが教えてくれるだろう（「誰か」が海図です）と、誰かを期待して生きています。ですが、生きることとは、自分の足で立ち、自分の足で歩くことです。世界に立ち向かうためには、自分が使えるしつかりした海図を自分で作ってゆかなければなりません。そうやってはじめて大きい意味や深い意味を発見することが出来るようになるのです。

出典 山鳥重『「わかる」とはどういうことか——認識の脳科学』（筑

摩書房、二〇〇二年）所収。出題にあたり一部を省略した。

問一 この文章で述べられている二つの「わかり」は、あなたの考える大学という場での学びにおいてどのような関係にあるか。八〇〇字程度（句読点を含む）で述べなさい。（四〇点）

問二 あなたの通学途中で、どの誰かは全くわからないけれど、気になる人物がいたとする。その人物のことをわかりたいと考えた時に、この文章に記載されている二つの「わかり」をどのようを利用してわかることができるか。通学状況と人物を具体的に想定して、一二〇〇字程度（句読点を含む）で述べなさい。（六〇点）